

# 変える・守る・育てる・創る

第60回

## 女だからの経営論

取材・文 三好 かやの



### 宮城春江さん (静岡県・相良町)

アロエランド  
〒421-0511 静岡県榛原郡相良町片浜783-2  
TEL 0548-52-3355

#### Profile

みやぎ・はるえ 1951年、静岡県相良町生まれ。金融機関に勤務した後、県内のサボテン農家へ嫁ぐ。40年代後半よりアロエの「不夜城」の栽培に着手。健康ブームに乗り直売、通信販売で全国的に展開。各地から視察が相次ぎ、アロエの効能や料理法を紹介していた。94年離婚。故郷の相良町で借りた荒地を切り開き、「アロエベラ」の栽培を始めると同時に、ジュース、化粧水などの商品開発も進める。98年12月「アロエランド」をオープン。栽培、加工、販売を手がけるほか、アロエの生活への生かし方を解くセミナーも開いている。

#### アロエのテーマパーク

静岡県相良町の「アロエランド」を訪れると、社長の宮城春江さん(50歳)が、園内を案内してくださった。エントランスからつづくアロエハウスには、さまざまな種類のアロエが並んでいる。その先は「アロエ風呂」。まだお客さんのいない浴室を見せてもらった。

三好「あれえ、アロエのお風呂って、緑色なんだと思ってました」

春江「アロエは乾燥させると茶色くなるんです。毎日100kg、刻んで乾燥させて、それを煮出したエキスを入れていきますから、お湯は茶色くなります。緑色のアロエ商品を見たら、ニセモノだと思った方がいいですよ。これが本当のアロエを使っている色です」

なるほど。次に商品販売スペースを通ると、ジュース、美肌水、ジェル、ヘアートニック、入浴剤、シャンプー、ジャム、キャンディー、アロエの入ったさつま揚げ……。さまざまなオリジナル商品が並んでいた。食堂で、アロエのジュースをすすめられた。

三好「あれ、苦くない。昔私が健康オタクの母に無理やり食べさせられたアロエはとても苦くて……。体

にいいものは不味いんだと思ってました」

春江「それは多分キダチアロエ。私が栽培しているのはアロエベラという別の品種で、葉肉が厚くて苦味も少ないんです」

たしかに。このアロエはでかい。葉っぱ1枚が1m以上ある。ひと口にアロエといっても、いろいろあるんだなあ。次に出てきたのは、アロエヨーグルト。白いヨーグルトの中から透明なアロエの「切り身」を探し出してスプーンですくうと、ピヨーン。とろろのように糸を引く。アロエって、こんなにネバネバしてたっけ？

春江「それがアロエのパワーの秘密、多糖体なんです」

三好「私が娘と食べてるアロエ入りのヨーグルトは、ネバネバしません」

春江「あれはタイで栽培したものを、シロップ漬けにして輸入しているんです。でも輸送している間に浸透圧の関係で、アロエの持っている体にいい成分は出てしまってます」

ほー。ここへ来ると「アロエ観」が変わるなあ。アロエを見て、食べて、お風呂に入って、オリジナル商品も15種類。そして春江さんによるアロエに関するセミナーも受講でき

る。ここはまさに、春江さんが築いた「アロエのテーマパーク」なのだ。

## 「不夜城」に火がついて…

春江さんがアロエと出会ったのは、昭和40年代の後半。サボテン農家に嫁いで5年ほどたった頃だった。雑誌「家の光」の別冊の中にアロエの「不夜城」を見つけ、苦味も少なく食用に向く品種だと知った。

当時、たまたま嫁ぎ先のサボテンハウスの片隅に、誰かにももらった「不夜城」が植えられていたのだが、だれも販売しようとは思っていないかった。そこで春江さんが、

「それじゃ、私に売らせてくれる？」  
「いいよ」

ということになり、近所の八百屋で販売することに。しかし、アロエの鉢植えは一度買えばそれっきり、なかなか後が続かない。そこで次に東名高速道路のパーキングエリアで販売したところ、多くの人の目にとまり、火がついた。

中でも三重県木曾岬町では、生活改善委員が着目。町中で不夜城の「一家一鉢運動」が展開された。役場が利用者にアンケートをとったところ、「血圧が下がった」「糖尿にいい」「便秘がよくなった」などの報告が得られた。

この成果は各地で評判になり、春江さんの家に、各地の農協婦人部がバスを連ねて研修に訪れるようになった。

「うちは普通の農家でしたから、皆さんがいらしてもお迎えする場所がない。出荷台の上にビニールをひいて、ガスコンロを持ち出して、アロエの良さ、料理法をお教えしました」

通販会社と提携しての全国展開。粉末にして商品開発にも着手した。さらに研修の受講者やお客様を招き入れるパーベキューガーデンも開園…。すべては順調のように思えた。

「開園から一年半後、私がかから身を引かなければならない事情が起きました。離婚したんです」



アロエランドの店内。鉢植え、生葉、真空パックされた「アロエの刺身」の他、ジュース、化粧水などのオリジナル商品も多数。

## アロエベラに賭けよう！

春江さんは自分の本意ではないけれど、3人の子どものうち長男を家に残し、未成年の2人の娘を引き取って、20年過暮らしたその家を出ることになってしまった。

「そのとき私、農業ってこんなものかと思いました。20年やっていても、辞めたときに職歴としての保障が何もない。農家の嫁は、離婚したら農業者の資格がないんです」

2人の娘を抱え、借家住まいとなつた春江さんは、生活費を得るためにさまざまな仕事に出る。レストランの厨房で野菜の皮むき、コロッケづくり：40歳を過ぎた女性が、精一杯働いても月15〜20万円にしかならない。元夫から財産分与されたお金もあるが、それを切り崩していくだけなのだろうか。そこで春江さんは奮起した。

「もう一度農業をやろう。15年間、私はアロエで生きてきたんじゃないか。もう一度アロエをつくろう」

15年の間に不夜城は20万株になつていた。元夫に苗を分けてくれるように申し入れたが、その願いは聞き届けられなかった。では、何をつくればいいのだろうか？

離婚のウワサはまたたく間に広が



荒地の状態から開墾した畑には、アロエベラがぎっしり

つた。それを聞きつけて、借家住まいの春江さんのもとに、ひよっこりある女性が訪ねてくる。近所の農家に嫁いでいた韓国人の女性だった。彼女の夫は養豚をやっていたのだが、リュウマチに悩んでいた。それを日本の医者や薬に頼らず、母国伝来の漢方薬と、アロエのジュースで治したという経験の持ち主だった。

「あなたは15年も不夜城、不夜城って、ちいちゃなアロエつくっていたけど、もうこれからはアロエベラよ」  
彼女の夫を治したのは、「アロエベラ」だったのだ。韓国のアロエベラ研究の第一人者金正文氏にも伝があるという。

「なんとか仕度するから、私を韓国へ連れて行って」

こうして金氏に会い、アロエベラ

の實力を確信して帰った後、春江さんはアロエベラについて猛勉強を始める。



自慢の商品(左)アロエベラジュース(900ml 3,000円)、(右)化粧水「天然之美肌水」(120ml 2,800円)  
※いずれも農場直売価格

「そのとき私は42歳と半。神様が普通に寿命をくれたらあと半分ある。残された人生はアロエベラをつくって、一人でも多くの人の健康と幸せに寄与していこうと」

こうして打ちたてたのが「アロエランド」の構想である。鉢植えだけではダメ。オリジナルの商品を作らなければ。誰もがアロエの良さを体感できるお風呂もつくろう。アロエが「野菜」であることを伝えるために、料理も出そう……。

さらに2001年4月、アロエでは日本初となる、JASの有機無農薬栽培の認定も取得。アロエは害虫や病気に強く、無農薬で栽培するのは可能なのだが、化学肥料を使わないとなかなか大きくならない。

観賞用にアロエベラを栽培している農家を訪ね、3000本の苗を譲ってもらったがまだ足りない。そこへたまたま輸入業者から、「メキシコから野生の苗が2万本入る」という情報が耳に入った。買うなら今だ。

自分名義の土地を持たない春江さんは、荒地地を見つけては、その地主を探し訪ね歩いた。幸いそういう土地は、耕す人もなく、「勤め人の若衆に休んでもらって草刈りしている」状態。春江さんには財産はないけれど、20年農業をやってきた実績がある。誰もが喜んで貸してくれた。

それが新たな資金が必要となる。公的資金を借り入れようと申請したがダメだった。春江さんには、資産も農地も夫もない。新規就農者でも後継者でもない。今の制度で融資を受けるのは難しい。

「その分時間をかけてじっくり育てているので、品質には自信があります。アロエランドも3周年。まだまだ皆さんにアロエのことを知っていただかないと。栽培面積ももっと増やしたい」

「あるとき私はつらくって、もう死んでしまったかもしれない。このお金だって主人がくれなかったら、なかったものだ。なかった命、なかったお金だったら、私はこれに賭けよう」

荒地を借りては草を刈り、藪を焼き払い、堆肥を入れて苗を植える。40歳を過ぎての出直し農業は、開拓団さながら。こうしてどんどん面積を増やし、現在栽培面積は5000坪を数える。もちろん、すべて借地だ。

春江さんへの融資が「JAハイナ」の会議にかかったとき、通常なら却下されるどころ、「土地はなくても、宮城さんは2万本の苗をもっている。これも立派な資産じゃないか」と、若い職員が説得してくれたのだ。

アロエと共に生きてきて、本当に辛い思いもしたけれど、出直しの人生は再びアロエと共に……春江さんには「アロエの神様」がついているんじゃないかと思ってしまう。本当に「人生を、命をかけて」栽培しているアロエベラであり、その商品なのだ。

こうして2万本の苗は、春江さん

「栽培、加工、販売、そして感動、癒しがすべて網羅された農業をやりた

い。私はアロエの栽培家として、皆さんをお迎えして、『アロエってこんなにいい野菜なんですよ』って情報を発信する場所がほしかった。そして皆さんの気持ちを受信する場所がほしかった」

という。こうして98年12月、念願のアロエランドがオープンした。体の芯まであったまるお風呂に入り、春江さんのセミナーを聞きに、年間2万人の来場者が訪れる。「アロエには500もの種類があるといわれていますが、食用としてはアロエベラがNo.1。持っている微量要素の数は200以上。解毒したり、体内の毒素をどんどん外に出して、血液をきれいにする力があります」



アロエでは日本初、有機無農薬栽培のJAS認定も取得

「アロエでは日本初、有機無農薬栽培のJAS認定も取得」

「アロエでは日本初、有機無農薬栽培のJAS認定も取得」